

參考文獻

中文文獻（依姓名筆劃排序）

（一）書籍

- 1、史尚寬，『勞動法原論（重刊）』（自版，1978年6月）。
- 2、台灣勞工陣線，『台灣勞工的主張—2000 勞動政策白皮書』（勞工雜誌社，1999年11月）。
- 3、成台生，『工會之研究』（高雄復文圖書出版社，2002年10月）。
- 4、李允傑，『政府與工會』（國立空中大學，2002年6月）。
- 5、林大鈞，「我國工會立法之研究」（工商教育出版社，1987年8月）。
- 6、林大鈞，『勞工政策與勞工法論』（華泰書局，1994年10月）。
- 7、林泰安，『雇主之不當勞動行為論（法理、行為認定基準篇）』（台灣復文興業，1997年2月）。
- 8、林宗弘、鄭力軒、徐千惠、廖郁毓、林良榮、廖偉程，『打拚為尊嚴—大同工會奮鬥史』（台灣勞工陣線，2000年9月）。
- 9、陳繼盛，『勞資關係』（正中書局，1979年5月）。
- 10、黃程貫，『勞動法（修訂再版）』（國立空中大學，1997年5月）。
- 11、黃越欽，『勞動法新論（修訂二版）』（翰蘆，2006年9月）。
- 12、焦興鎧譯，William Gould 著，『美國勞工法入門』（國立編譯館，1996年5月）。
- 13、楊通軒，『集體勞工法—理論與實務』（五南，2007年11月）。
- 14、臺灣勞動法學會編，『勞動基準法釋義—施行二十年之回顧與展望』（新學林，2005年5月）。
- 15、劉志鵬，『勞動法解讀』（元照，1996年1月）。
- 16、鄭津津，『職場與法律（二版）』（新學林，2007年10月）。

（二）期刊論文

- 1、王厚偉、黃琦雅，「我國不當勞動行為救濟制度之窘境與展望—由美日制度看台灣未來發展方向」，台灣勞工 13 期（2008年5月）。
- 2、王能君，「台灣勞動法制的形成與展開過程初探」，思與言 40 卷 1 期（2002年3月）。
- 3、王能君，「日本「解僱權濫用法理」與「整理解僱法理」」，載於：臺灣勞動法學會學報 3 期（2004年6月）。
- 4、史尚寬，「二十年來之勞工立法」，法令月刊 21 卷 10 期（1970年10月）。
- 5、史太璞，「我國工會法研究」（正大印書館，1945年4月。附於史尚寬，『勞動法原論』之後）。
- 6、林更盛，「作為解僱事由之「勞工確不能勝任工作」」，載於：氏著，『勞動法案例研究（一）』（翰蘆，2002年5月）。
- 7、邱駿彥，「勞動契約訂定階段之相關法律問題」，華岡法粹 30 期（2003年12

- 月), 233 頁。
- 8、張烽益,「雇主之不當勞動行為規範之探討」,台灣勞工 25 期(1994 年 5 月)。
 - 9、張琬如,「論勞動基準法第十一條第五款之「勞工對於所擔任之工作確不能勝任」,載於:林輝煌、李金定編,『司法官 46 期法學研究報告合輯(第一輯)』(法務部司法官訓練所,2007 年 9 月)。
 - 10、黃程貫,「關於權利事項與調整事項勞資爭議之區分—高院七十八年度勞上字第十三號、高院七十八年度勞抗字十號」,載於:臺灣勞動法學會編,『勞動法裁判選輯(一)』(元照,1999 年 12 月)。
 - 11、黃程貫,「我國罷工合法要件之檢討」,月旦法學雜誌 101 期(2004 年 4 月)。
 - 12、劉志鵬,「新時代裡的舊法制—台灣勞動法制的困境」,台灣法學會報,21 期(2000 年 11 月)。
 - 13、劉志鵬,「論試用期間」,載於:氏著,『勞動法理論與判決研究』(元照,2000 年 5 月)。
 - 14、劉志鵬,「論「勞工確不能勝任工作」—最高法院八十四年度台上字第六七三號判決評釋」,載於:氏著,『勞動法理論與判決研究』(元照,2000 年 5 月)。

(三) 學術研討會論文

- 1、張鑫隆,「從日本不當勞動行為之判例法理看台灣「不公平勞動行為」制度之新展開」,發表於:行政院勞工委員會主辦,94 年勞工法規論壇會議(台北公教人力發展中心,2005 年 12 月 13 日)。
- 2、張鑫隆,「日本勞動法制之最新發展趨勢—二〇〇〇~二〇〇七年」,發表於:行政院勞工委員會、臺灣勞動法學會主辦,各國勞動法制之最新發展趨勢—二〇〇〇~二〇〇七學術研討會(中國文化大學,2008 年 5 月 25 日)。

(四) 學位論文

- 1、吳永發,『日本不當勞動行為制度之研究』(輔仁大學法律學研究所碩士論文,1995 年 6 月)。
- 2、周兆昱,『勞動關係中雇主懲戒權行使界限之研究』(文化大學勞工研究所碩士論文,1999 年 6 月)。
- 3、林良榮,『論企業內工會活動之權利保障—以日本戰後學說及判例發展為中心』(國立中正大學勞工研究所碩士論文,1997 年 7 月)。
- 4、李麗珍,『論雇主懲戒權行使之界限—以我國法院判決之分析為中心』(國立臺灣大學法律學院法律學研究所碩士論文,2008 年 7 月)。
- 5、張琬如,『我國勞動基準法第十一條解僱理由之研究』(國立臺灣大學法律學研究所碩士論文,2005 年 7 月)。
- 6、陳蕙儀,『我國與日本調職法理之比較研究』(國立臺灣大學法律學院法律學研究所碩士論文,2008 年 7 月)。
- 7、游千賢,『我國勞動基準法第十二條第一項第四款之研究』(國立臺灣大學法律學研究所碩士論文,2007 年 1 月)。

- 8、葉建廷，『不當勞動行為規範法制之研究』（中國文化大學勞工研究所碩士論文，1997年6月）。
- 9、薛進坤，『我國不當勞動行為法規範之探討』（政治大學勞工研究所碩士論文，1998年1月）。

日文文獻（依姓名之五十音順序排序）

（一）書籍

- 1、青木宗也、金子征史，『労働関係法（改訂版）』（日本評論社，1994年6月）。
- 2、浅井清信，『新訂労働法論』（有斐閣，1969年4月）。
- 3、吾妻光俊，『解雇』（勁草書房，1956年5月）。
- 4、吾妻光俊，『新訂労働法概論』（青林書院，1975年）。
- 5、石井照久，『新版労働法（第三版）』（弘文堂，1973年5月）。
- 6、石川吉右衛門，『労働組合法』（有斐閣，1978年10月）。
- 7、大内伸哉，『労働法実務講義（第二版）』（日本法令，2005年10月）。
- 8、大内伸哉，『労働者代表法制に関する研究』（有斐閣，2007年2月）。
- 9、賀來才二郎，『改正労働組合法の詳解』（中央労働學園，1949年）。
- 10、片岡昇，『使用者の争議対抗行為』（総合労働研究所，1969年4月）。
- 11、片岡昇、大沼邦博，『労働団体法上巻』（青林書院，1992年1月）。
- 12、片岡昇著、村中孝史補訂，『労働法（1）-総論・労働団体法（第四版）』（有斐閣，2007年6月）。
- 13、菊池勇夫、林迪廣，『全訂労働組合法（第二版）』（有斐閣，1984年2月）。
- 14、岸井貞男，『不当労働行為の法理論—不当労働行為の原理(上)』（総合労働研究所，1978年4月）。
- 15、岸井貞男，『団結活動と不当労働行為—不当労働行為の原理(下)』（総合労働研究所，1978年4月）。
- 16、久保敬治、浜田富士郎，『労働法』（ミネルヴァ書房，1993年5月）。
- 17、厚生労働省労政担当参事官室，『労働組合法・労働関係調整法（五訂新版）』（労務行政，2006年3月）。
- 18、小西國友、渡辺章、中嶋士元也，『労働関係法（第五版）』（有斐閣，2007年1月）。
- 19、近藤昭雄，『労働法Ⅰ』（中央大学出版部，2003年4月）。
- 20、下井隆史，『劳使関係法』（有斐閣，1995年5月）。
- 21、下井隆史，『労働基準法（第四版）』（有斐閣，2007年11月）。
- 22、菅野和夫，『労働法（第八版）』（弘文堂，2008年4月）。
- 23、菅野和夫，『新雇用社会の法（補訂版）』（有斐閣，2004年4月）。
- 24、角田邦重、西谷敏、菊池高志，『労働法講義2』（有斐閣，1985年8月）。
- 25、角田邦重、毛塚勝利、脇田滋編，『新現代労働法入門（第三版）』（法律文化社，2005年6月）。
- 26、塚本重頼，『不当労働行為の認定基準』（総合労働研究所，1989年3月）。
- 27、土田道夫，『労働法概説』（弘文堂，2008年4月）。

- 28、東京大学労働法研究会、『注釈労働組合法上巻』(有斐閣,1980年12月)、
『注釈労働組合法下巻』(有斐閣,1982年12月)。
- 29、道幸哲也、『労使関係のルール』(労働旬報社,1995年2月)。
- 30、道幸哲也、『不当労働行為争訟法の研究—救済利益と命令の司法審査』(有斐閣,1988年11月)。
- 31、道幸哲也、『不当労働行為の行政救済法理』(信山社,1998年10月)。
- 32、道幸哲也、『不当労働行為法理の基本構造』(北海道大学図書刊行会,2002年7月)。
- 33、道幸哲也、『労働組合活用のルール(第二版)』(旬報社,2006年5月)。
- 34、道幸哲也、『不当労働行為の成立要件』(信山社,2007年7月)。
- 35、中窪裕也、野田進、和田肇、『労働法の世界(第七版)』(有斐閣,2007年4月)。
- 36、中窪裕也、『アメリカ労働法』(弘文堂,1995年9月)。
- 37、中山和久、『不当労働行為論』(一粒社,1981年10月)。
- 38、中山和久、深山喜一郎、宮本安美、本田尊正、岸井貞男、伊藤博義、萬井隆令、『注釈労働組合法・労働関係調整法』(有斐閣,1989年2月)。
- 39、西谷敏、『規制が支える自己決定』(2004年11月)。
- 40、西谷敏、『労働組合法(第二版)』(有斐閣,2006年11月)。
- 41、沼田稻次郎、『運動のなかの労働法(第三版)』(旬報社,1972年4月)。
- 42、沼田稻次郎、『労働法要説(改訂版)』(法律文化社,1972年10月)。
- 43、野村平爾、沼田稻次郎、青木宗也、横井芳宏編、『基本法コンメンタール—労働組合法(新版)』(日本評論社,1978年5月)。
- 44、橋詰洋三、『実務労働法Ⅱ』(全国労働基準関係団体連合会,2005年11月)。
- 45、外尾健一、『労働団体法』(筑摩書房,1975年9月)。
- 46、外尾健一、『団結権保障の法理Ⅰ』(信山社,1998年2月)。
- 47、本多淳亮、『業務命令、施設管理権と組合活動(第八版)』(労働法学,1974年11月)。
- 48、本多淳亮、『労働組合法講話』(青林書院,1988年1月)。
- 49、本多淳亮、片岡昇、岸井貞男、桑原昌宏、三島宗彦、橋詰洋三、初井常喜、森本弥之介、窪田隼人、『共同研究労働法 2-不当労働行為論』(法律文化社,1969年12月)。
- 50、本田尊正、『不当労働行為(改訂版)』(同文館,1978年2月)。
- 51、水町勇一郎、『労働法(二版)』(有斐閣,2008年3月)。
- 52、三藤正、『組合活動と整理解雇』(日本評論新社,1956年7月)。
- 53、初井常喜『経営秩序と組合活動—不当労働行為の法理』(総合労働研究所,1965年5月)。
- 54、盛誠吾、『労働法総論・労使関係法』(新世社,2000年5月)。
- 55、安枝英紳、西村健一郎、『労働法(第九版)』(有斐閣,2006年3月)。
- 56、山川隆一、『不当労働行為の行政救済法理』(信山社,1990年7月)。
- 57、山川隆一、『雇用関係法(第四版)』(新世社,2008年4月)。
- 58、山口浩一郎、『労働組合法(第二版)』(有斐閣,1996年3月)。

- 59、萬井隆令，『労働契約締結の法理』（有斐閣，1997年11月）。
- 60、萬井隆令、西谷敏編，『労働法Ⅰ－集团的労働関係法－（第三版）』（法律文化社，2006年4月）。

（二）期刊論文

- 1、青野覚，「無許可ビラ配布に対する懲戒処分の不当労働行為性」，季刊労働法177号（1995年12月）。
- 2、秋田成就，「賃金決定における人事考課の法的問題」，季刊労働法105号（1977年9月）。
- 3、秋田成就，「労使関係と損害賠償」，季刊労働法112号（1979年6月）。
- 4、荒木誠之，「不當労働行為論」，労働法第3号（1953年10月）。
- 5、荒木誠之，「支配介入」，載於：日本労働法学会編，『労働法講座第2巻－団結権及び不当労働行為』（有斐閣，1956年10月）。
- 6、荒木誠之，「不當労働行為制度における使用者の地位－不當労働行為論の反省」，学会誌労働法12号（1958年10月）。
- 7、荒木尚志、山川隆一，「ディアログ・労働判例この一年の争点」，日本労働研究雑誌496号（2001年11月）。
- 8、荒木尚志，「企業組織の変動と使用者の契約責任」，載於：角田邦重、毛塚勝利、浅倉むつ子，『労働法の争点（第三版）』（有斐閣，2004年12月）。
- 9、荒木尚志，「新労働法講義第3回－第2章 雇用保障と雇用・労使関係システム（2）」，法学教室309期（2006年6月）。
- 10、荒木尚志，「新労働法講義第10回－第6章労働関係の成立」，法学教室316号（2007年1月）。
- 11、荒木尚志，「新労働法講義第17回－第11章人事」，法学教室323号（2007年8月）。
- 12、荒木尚志，「新労働法講義第19回－第13章労働組合」，法学教室325号（2007年10月）。
- 13、荒木尚志，「新労働法講義第22回－第16章団体行動（2）、第17章不当労働行為（1）」，法学教室328号（2008年1月）。
- 14、荒木尚志，「新労働法講義第23回－第17章不当労働行為（2）」，法学教室329号（2008年2月）。
- 15、有泉亨，「団結権の侵害とその救済」，載於：『労働法経済法の諸問題－末川還暦記念』（1953年11月）。
- 16、石井照久，「不当労働行為意思について（二）」，法曹時報3巻4号（1951年4月）。
- 17、石井保雄，「下級職制による脱退勧奨行為と使用者への不当労働行為帰責性－中労委（JR東海〔新幹線・科長脱退勧奨〕）事件」，労働判例935号（2007年7月）。
- 18、石川吉右衛門，「労働組合法第七条第一号と同三号との関係」，載於：『労働法と経済法の理論－菊池勇夫教授六十年祝賀記念論文集』（有斐閣，1960

- 年11月)。
- 19、岩垂肇,「解雇原因の競合と不当労働行為の成否」,季刊労働法24号(1957年6月)。
 - 20、岩垂肇,「企業廃止と不当労働行為」,載於:『労働法と経済法の理論—菊池勇夫教授六十年祝賀記念論文集』(有斐閣,1960年11月)。
 - 21、伊藤博義,「不利益取扱」,載於:『季刊労働法別冊4号—労働団体法』(総合労働研究所,1979年4月)。
 - 22、井上修一,「幹部責任の追及」,載於:日本労働法学会編,『現代労働法講座第五卷』(総合労働研究所,1980年7月)。
 - 23、大内伸哉,「管理職組合をめぐる法的問題」,労働法学会誌88号(1996年11月)。
 - 24、大野一尚,「配転命令権濫用の判断視角—最近の判例動向とその問題点」,労働法律旬報1377号(1996年2月)。
 - 25、大沼邦博,「労務指揮権と組合活動の権利」,載於:日本労働法学会編,『現代労働法講座第3巻』(1981年3月)。
 - 26、大沼邦博,「不当労働行為(I)」,労働判例711号(1997年5月);同「不当労働行為(II)」,労働判例713号(1997年6月)。
 - 27、大和田敢太,「企業解散と不当労働行為」,載於:角田邦重、毛塚勝利、浅倉むつ子,『労働法の争点(第三版)』(有斐閣,2004年12月)。
 - 28、緒方桂子,「昇格差別による不当労働行為の成立を否定した例」,民商法雑誌114巻1号(1996年4月)。
 - 29、緒方節郎,「不当労働行為の主体」,載於:石井照久、有泉亨編,『労働法大系第4巻—不当労働行為』(有斐閣,1963年7月)。
 - 30、奥山明良,「継続する行為—紅屋商事事件」,載於:菅野和夫、西谷敏、荒木尚志編,『労働判例百選(第七版)』(有斐閣,2002年11月)。
 - 31、香川孝三,「賃金・昇格差別と不当労働行為」,日本労働法学会誌54号(1979年10月)。
 - 32、香川孝三,「差別待遇」,載於:日本労働法学会編『現代労働法講座第7巻—不当労働行為I』(総合労働研究所,1982年2月)。
 - 33、香川孝三,「ピラ配布に対する懲戒処分等の不当労働行為—倉田学園事件一」,ジュリスト1081号(1995年12月)。
 - 34、片岡昇,「不当労働行為意思について」,法学論叢82巻2、3、4号(1968年1月)。
 - 35、唐津博,「会社解散—東京書院事件」,載於:菅野和夫、西谷敏、荒木尚志編,『労働判例百選(第七版)』(有斐閣,2002年11月)。
 - 36、菊谷達彌,「不当労働行為救済申立期間と「継続する行為」の法理」,季刊労働法103号(1977年3月)。
 - 37、菊谷達彌,「不当労働行為制度の意義」,載於:『季刊労働法別冊第四冊—労働組合法』(総合労働研究所,1979年6月)。
 - 38、岸井貞男,「不当労働行為意思について」,関西大学法学論集11巻6号(1962年3月)。
 - 39、岸井貞男,「栄転と不当労働行為」,載於:片岡昇編,『セミナー法学全集

- 13-労働法』(日本評論社,1975年4月)。
- 40、岸井貞男,「不当労働行為制度の本質」,載於:日本労働法学会編『現代労働法講座第7巻—不当労働行為I』(総合労働研究所,1982年2月)。
- 41、熊倉武,「不当労働行為意思の認定」,載於:日本労働法学会編,『新労働法講座第6巻—不当労働行為』(有斐閣,1967年6月)。
- 42、小嶋典明,「幹部責任と不当労働行為」,載於:『労働法学の理論と課題—片岡昇先生還暦記念』(有斐閣,1988年4月)。
- 43、小西國友,「解雇の自由と不当労働行為」,労経速712号(1970年4月)。
- 44、小宮文人,「不当労働行為の認定基準」,載於:日本労働法学会編,『講座21世紀の労働法第8巻—利益代表システムと団結権』(有斐閣,2000年5月)。
- 45、小室直人,「不当労働行為法の原状回復」,載於:『現代の民事法:川崎秀司先生・重倉珉祐先生古稀記念論文集』(法律文化社,1977年11月)。
- 46、佐伯静治,「不利益取扱の態様」,載於:日本労働法学会編,『新労働法講座第6巻—不当労働行為』(有斐閣,1967年6月)。
- 47、坂本宏志,「バックペイと中間収入の控除」,載於:角田邦重、毛塚勝利、浅倉むつ子,『労働法の争点(第三版)』(有斐閣,2004年12月)。
- 48、佐藤香,「救済命令の内容の限界」,載於:外尾健一編,『不当労働行為の法理』(有斐閣,1985年10月)。
- 49、島田陽一,「採用の自由」,載於:菅野和夫、西谷敏、荒木尚志編,『労働判例百選(第七版)』(有斐閣,2002年11月)。
- 50、清水一行,「組合併存下における残業組入れ拒否と不当労働行為—日産自動車事件」,ジュリスト666号(1978年6月)。
- 51、菅野和夫、藤田耕三,「(対談)改正労働組合法の成果と課題」,ジュリスト1335号(2008年4月)。
- 52、鈴木芳明,「労働組合の資格要件」,載於:角田邦重、毛塚勝利、浅倉むつ子編,『労働法の争点(第三版)』(有斐閣,2004年12月)。
- 53、角田邦重,「企業秩序と組合活動」,載於:蓼沼謙一、横井芳宏、角田邦重編,『労働法の争点(新版)』(有斐閣,1990年11月)。
- 54、諏訪康雄,「査定差別の認定と救済—紅屋商事事件」,載於:菅野和夫、西谷敏、荒木尚志編,『労働判例百選(第七版)』(有斐閣,2002年11月)。
- 55、清正寛,「不当労働行為の意思」,載於:角田邦重、毛塚勝利、浅倉むつ子編,『労働法の争点(第三版)』(有斐閣,2004年12月)。
- 56、高木紘一,「配轉・出向」,載於:日本労働法学会編,『現代労働法講座第10巻—労働契約・就業規則』(総合労働研究所,1982年8月)。
- 57、高木紘一,「企業解散と不当労働行為」,載於:蓼沼謙一、横井芳宏、角田邦重編,『労働法の争点(新版)』(有斐閣,1990年11月)。
- 58、高木紘一,「残業差別と不当労働行為」,季刊労働法161号(1991年12月)。
- 59、瀧澤仁唱,「不当労働行為の司法救済—医療法人新光会事件」,載於:山口浩一郎、菅野和夫、西谷敏編『労働判例百選(第六版)』(有斐閣,1995年10月)。
- 60、蓼沼謙一,「不利益な取扱」の態様」,載於:『総合判例研究叢書労働法(12)』

- (有斐閣, 1967年7月)。
- 61、田端博邦, 「労働組合の……行為」とその評価の視角, 載於: 日本労働法学会編, 『現代労働法講座第3巻』(1981年3月)。
 - 62、千種達夫, 「不当労働行為意思の認定」, 載於: 石井照久、有泉亨編, 『労働法大系第4巻—不当労働行為』(有斐閣, 1963年7月)。
 - 63、中央労働委員会, 「労働委員会における「大量観察方式」の実務上の運用について」, 載於: 中央労働時報1055号(2006年4月)。
 - 64、塚本重頼, 「労働委員会の自由裁量とその制約—救済命令の主文の構成(上)」, 中央労働時報534号(1972年11月)。
 - 65、辻秀典, 「管理職と労働法」, 載於: 日本労働法学会編, 『講座21世紀の労働法第1巻—21世紀労働法の展望』(有斐閣, 2000年5月)。
 - 66、蔦川忠久, 「黄犬契約」, 載於: 日本労働法学会編, 『現代労働法講座第7巻—不当労働行為I』(総合労働研究所, 1982年2月)。
 - 67、土田道夫, 「日本型雇用制度の変化と法」, 載於: 日本労働法学会編, 『講座21世紀の労働法第1巻—21世紀労働法の展望』(有斐閣, 2000年5月)。
 - 68、道幸哲也, 「査定差別の認定と救済—紅屋商事事件」, 載於: 山口浩一郎、菅野和夫、西谷敏編『労働判例百選(第六版)』(有斐閣, 1995年10月)。
 - 69、道幸哲也, 「JR採用差別事件」, 法学セミナー592号(2004年4月)。
 - 70、道幸哲也, 「JRの採用差別の不当労働行為性」, ジュリスト1269号(2004年6月)。
 - 71、道幸哲也, 「中間管理職の反組合的行為の使用への帰責」, 法学セミナー628号(2007年4月)。
 - 72、道幸哲也, 「下級職制による脱退勧奨行為の不当労働行為性—JR東海事件」, 法律時報79巻11号(2007年10月)。
 - 73、直井春夫、成川恵美子, 「査定差別」, 載於: 日本労働法学会編, 『講座21世紀の労働法第8巻—利益代表システムと団結権』(有斐閣, 2000年5月)。
 - 74、中嶋士元也, 「不当労働行為の救済」, 載於: 角田邦重、毛塚勝利、浅倉むつ子編, 『労働法の争点(第三版)』(有斐閣, 2004年12月)。
 - 75、中島正雄, 「労働法における法人格否認の法理の展開」, 載於: 『労働法学の理論と課題—片岡昇先生還暦記念』(有斐閣, 1988年4月)。
 - 76、中山和久, 「配転と不当労働行為」, 労働法律旬報324号(1950年8月)。
 - 77、西谷敏, 「会社解散・解雇と法人格否認の法理」, 載於: 大阪市立大学法学雑誌32巻1号(1985年7月)。
 - 78、西原寛一, 「企業の解散と不当労働行為」, 載於: 石井照久、有泉亨編, 『労働法大系第4巻—不当労働行為』(有斐閣, 1963年7月)。
 - 79、西村健一郎, 「使用者がその責に帰すべき事由による解雇期間中の賃金を労働者に支払うべき場合の労基法12条4項所定の賃金と労働者が解雇期間中他の職に就いて得た利益の控除—あけぼのタクシー事件(最判昭和62.4.2)」, 判例時報1260号(1988年3月)。
 - 80、沼田稻次郎, 「不当労働行為と団結権との関係について」, 載於: 『労働法経済法の諸問題—末川先生還暦記念』(有斐閣, 1953年11月)。
 - 81、沼田稻次郎, 「労働組合の正当な行為」, 載於: 日本労働法学会編, 『新労

- 働法講座第6巻—不当労働行為』(有斐閣,1967年6月)。
- 82、野田進,「不利益取扱としての解雇」,載於:外尾健一編,『不当労働行為の法理』(有斐閣,1985年10月)。
- 83、野田進,「ストライキの後になされたの配転と不当労働行為の成否—中労委(西神テトラパック事件)事件」,ジュリスト1178号(2001年6月)。
- 84、野田進,「労組法における「使用者」の概念」,NBL872号(2008年1月)。
- 85、橋詰洋三,「会社解散と不当労働行為」,載於:日本労働法学会編,『新労働法講座第6巻—不当労働行為』(有斐閣,1967年6月)。
- 86、橋詰洋三,「雇入れ拒否と不当労働行為」,載於:蓼沼謙一、横井芳宏、角田邦重編,『労働法の争点(新版)』(有斐閣,1990年11月)。
- 87、浜田富士郎,「病院施設を買い取り、新規の病院として経営を始めた医療法人による、組合活動家たる旧病院看護職員の不採用が労組法七条一・三号の不当労働行為に当たるとされた事例—医療法人財団青山会事件」,判例評論518号(2002年4月)。
- 88、原田賢司,「不当労働行為法における精神的不利益取扱と立証及び救済上の問題」,載於:中山政夫編,『労働法学をめぐる諸問題—稲垣名譽教授古稀記念論文集』(日本大学法学部,1986年5月)。
- 89、平川亮一,「バックペイと中間収入—第二鳩タクシー事件」,載於:山口浩一郎、菅野和夫、西谷敏編『労働判例百選(第六版)』(有斐閣,1995年10月)。
- 90、藤川久昭,「雇入れ拒否と不当労働行為」,載於:角田邦重、毛塚勝利、浅倉むつ子編,『労働法の争点(第三版)』(有斐閣,2004年12月)。
- 91、外尾健一,「わが国における不当労働行為制度の歴史的沿革」,載於:外尾健一編,『不当労働行為の法理』(有斐閣,1985年10月)。
- 92、本多淳亮,「配置転換・転勤をめぐる法律問題」,載於:『労働法と経済法の理論—菊池勇夫教授六十年祝賀記念論文集』(有斐閣,1960年11月)。
- 93、本多淳亮,「労働組合の政治活動をめぐる法律問題」,季刊労働法50号(1963年12月)。
- 94、本多淳亮,「日本法上の不当労働行為制度」,載於:日本労働法学会編,『新労働法講座第6巻—不当労働行為』(有斐閣,1967年6月)。
- 95、本多淳亮,「団結権保障と不当労働行為制度」,載於:蓼沼謙一、横井芳宏、角田邦重編,『労働法の争点(新版)』(有斐閣,1990年11月)。
- 96、正田彬,「会社解散と不当労働行為」,季刊労働法46号(1962年12月)。
- 97、松永久,「労働組合法改正の経緯と概要」,ジュリスト1284期(2005年2月)。
- 98、馬渡淳一郎,「雇用主との間の請負契約により労働者の派遣を受けている事業主が労働組合法七条にいう「使用者」に当たるとされた」,民商法雑誌第114巻2号(1996年5月)。
- 99、馬渡淳一郎,「集团的労働関係における使用者—朝日放送事件」,載於:菅野和夫、西谷敏、荒木尚志編,『労働判例百選(第七版)』(有斐閣,2002年11月)。
- 100、水町勇一郎,「採用の自由」,載於:角田邦重、毛塚勝利、浅倉むつ子編,

- 『労働法の争点（第三版）』（有斐閣，2004年12月）。
- 101、三藤正，「不利益取扱」，載於：日本労働法学会編，『労働法講座第2巻－団結権及び不当労働行為』（有斐閣，1956年10月）。
 - 102、峯村光郎，「不利益取扱」，載於：石井照久、有泉亨編，『労働法大系第4巻－不当労働行為』（有斐閣，1963年7月）。
 - 103、宮里邦雄，「労働委員会の法理」，載於：日本労働法学会編，『講座 21世紀の労働法第8巻－利益代表システムと団結権』（有斐閣，2000年5月）。
 - 104、村中孝史，「バックペイと中間収入－第二鳩タクシー事件」，載於：菅野和夫、西谷敏、荒木尚志編，『労働判例百選（第七版）』（有斐閣，2002年11月）。
 - 105、村中孝史，「不当労働行為制度の課題と労組法改正の意義」，ジュリスト1284期（2005年2月）。
 - 106、村中孝史，「探究労働法の現代的課題（第9回）－採用拒否と不当労働行為－労働法学の立場から」，ジュリスト1312号（2006年6月）。
 - 107、本久洋一，「管理職組合」，載於：角田邦重、毛塚勝利、浅倉むつ子，『労働法の争点（第三版）』（有斐閣，2004年12月）。
 - 108、初井常喜，「団結権保障と組合活動－労組法第七条一号にいわゆる「労働組合の……行為」をめぐって」，載於：『団結活動の法理－野村平爾教授還暦記念論文集（三版）』（1980年9月三版）。
 - 109、初山錚吾，「不当労働行為の意思」，載於：蓼沼謙一、横井芳宏、角田邦重編，『労働法の争点（新版）』（有斐閣，1990年11月）。
 - 110、盛誠吾，「違法解雇と中間収入」，一橋論叢106巻1号（1991年7月）。
 - 111、盛誠吾，「JR設立に伴う差別事件と不当労働行為の成否」，民商法雑誌131巻1号（2004年10月）。
 - 112、森戸英幸，「辞職と合意解約」，載於：『講座 21世紀の労働法第4巻』（有斐閣，2000年10月）。
 - 113、森本弥之介，「採用拒否・人事異動」，載於：日本労働法学会編，『現代労働法講座第8巻－不当労働行為II』（総合労働研究所，1982年4月）。
 - 114、門田信男，「不利益取扱の要件」，載於：日本労働法学会編，『新労働法講座第6巻－不当労働行為』（有斐閣，1967年6月）。
 - 115、山川隆一，「集团的労働関係における使用者－朝日放送事件」，載於：山口浩一郎、菅野和夫、西谷敏編，『労働判例百選（第六版）』（有斐閣，1995年10月）。
 - 116、山川隆一，「探究労働法の現代的課題（第1回）－改正労働組合法における論点と今後の課題－労働法学の立場から」，ジュリスト1296号（2005年9月）。
 - 117、山川隆一，「査定差別事件における不当労働行為の認定と大量観察方式」，載於：慶應法学7号（2007年3月）。
 - 118、山口浩一郎，「行政救済と司法救済」，載於：日本労働法学会編，『講座 21世紀の労働法第8巻－利益代表システムと団結権』（有斐閣，2000年5月）。
 - 119、大和哲夫，「使用者の行為」，載於：日本労働法学会編，『現代労働法講座

- 第7巻—不当労働行為I』（総合労働研究所，1982年2月）。
- 120、横井芳弘，「団結権の保障と不当労働行為」，載於：片岡昇、横井芳弘編，『演習労働法』（青林書院，1972年3月）。
- 121、横井芳弘，「不当労働行為の主体」，載於：片岡昇、横井芳弘編，『演習労働法』（青林書院，1972年3月）。
- 122、萬井隆令，「不利益取扱の態様—複数组合併存下の不利益取扱」，載於：外尾健一編，『不当労働行為の法理』（有斐閣，1985年10月）。
- 123、萬井隆令，「採用拒否と不当労働行為—純然たる新規採用の場合について」，龍谷法學33巻3号（2000年12月）。
- 124、萬井隆令，「採用拒否と不当労働行為—青山会事件」，龍谷法學35巻1号（2002年8月）。
- 125、萬井隆令，「不採用と不当労働行為—青山会事件」，載於：菅野和夫、西谷敏、荒木尚志編，『労働判例百選（第七版）』（有斐閣，2002年11月）。
- 126、萬井隆令，「企業組織之變動と労働契約関係」，載於：西谷敏、中島正雄、奥田香子編，『轉換期労働法の課題』（旬報社，2003年7月）。
- 127、萬井隆令，「営業譲渡先による教員の承継拒否と不当労働行為—東京日新学園事件」，法律時報78巻4号（2005年4月）。
- 128、渡辺章，「不当労働行為審査制度と労組法の改正」，ジュリスト1335号（2008年4月）。

